
僕のもとへ天使と悪魔がやって来ました。

三好 悠奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のもとへ天使と悪魔がやって来ました。

【Nコード】

N5246Y

【作者名】

三好 悠奈

【あらすじ】

突然現れた天使と悪魔に、「天界も地獄も神々も十の世界から来たモンスターたちの所為でいまだかつてない危機に襲われている。君は俺たちを助ける事のできる人間だ。」と断言された智樹。嫌がりながらも無理やり天使と悪魔と神々を助ける勇者として天界に連れて行かれるが……。

飯田 智樹一いいだ ともし一はれつきとした仏教徒であった。
今だって、祖母の姉の夫の従兄弟の……、遠い親戚の葬式に出席させられている。

学校まで休んで、そして今日は部活で大事な試合があったのだ。

「まだ終わらない？」

隣に座っていた母親にコソコソ話しかけるが、適当にあしらわれた。
長い長いお経に苛立ちが募る。

早く終わったとして、部活にいけるわけではないのだが、この退屈な人と人との最後の儀式から、一刻も早く抜け出したかった。

また、智樹には涙もろい一面があつて、

お経の後に遺族が泣きながら話す思い出話のようなものを聞くと知らない人であるにもかかわらず、遺族の悲しさを感じて泣いてしまふ。

そんな場面を家族に見せたくないというのもここから抜け出したい理由の一つにあつた。

「トイレ行って来ていい？」

なんとかここから抜け出そうと母親に話しかけた。

母は 早く言つて来なさい と言うように顎を動かすと智樹は頷いた。

ゆっくりと立ち上がる。

周りの人たちが、立ち上がった智樹を見るが何も言わなかった。

葬式場から出ると大きく、綺麗な庭があつた。

真ん中には鯉が悠々と泳いでいるため池があり、その周りには色とりどりの花が咲いていた。

奥のほうへ行くと木が森のように植えられていて、鳥の鳴き声も聞こえる。

上を見上げると木漏れ日が智樹に差し込んだ。

本当に綺麗だ。

いつもはこんな事思う智樹ではないが葬式という特別な行事もあったからだろうか。

すぐそこには道路とこの場所とを仕切る壁がある。

智樹は、ここが仕切られた天国のように思えた。

そのままフラフラと上を見上げたり、花を見たりして歩いていくと庭の隅の薄暗い場所に、小さな30cm四方位の祠が見えた。

智樹はそこへ近づき、祠の中を覗き込むと、何かいた。

目を凝らしよく見ると虫だった。正確に言えば蝶と小さなムカデだ。なんだか、虫に祠を汚されている気分になった智樹は蝶とムカデを祠の中からつまみ出した。

他の人ならムカデなど触れないだろうが、智樹はそれが出来た。いつもなら、確実にそんな事はしないのだが。

そして、祠への興味も薄れその場を立ち去ろうとした時だった。

「おい、よくも俺とコイツの勝負、邪魔してくれたな。」

そう、後ろから話しかけられた。

ここは、薄暗い庭の隅であり、智樹のほかには誰も居ないはずだったのだ。

智樹は驚き、ゆっくりと後ろを向いた。

そこには、黒い羽の生えた猫目の黒髪の悪魔と、

白い羽の生えたタレ目の銀髪のア天使が立っていた。

驚きのあまり、何も言えず固まってしまった智樹に悪魔は

「お前が邪魔したから、俺かコイツじゃなくお前 飯田 智樹 が
モンスターを

倒さないといけない事になったんだぞ！」

モンスター……？俺が倒す……？

アニメの中でしか見た事ない言葉が智樹の前に並んだ。

なんで、俺の名前を知っているんだ……？

理解できずに、下を向き考え込んでいると天使が

「今、天界と地獄は十の世界から来たモンスターたちの所為で今までにない

危機に襲われているんだ。僕らはモンスターを倒す勇者候補に神から選ばれた。

そして、さつき君が止めた戦いに勝ったほうがモンスターを倒しにいったんだ。

だけど、君はそれを止めたよね。神から前もってその場合は止めた本人がモンスターを

倒しに行かなければならないって教えられていた。だから君はモンスターを倒す勇者になるんだよ。

意味分かる……？」

蟻の行列のように意味の分からない言葉が並ぶ。

天使の問いに啞然としたまま首を振ると、天使は微笑み悪魔は馬鹿にしたような顔で

「とりあえず、神のもとへ。」

そう言った。

その瞬間、智樹は気を失った。

気がつくと、明るくて地面は白く、花が一面に咲いている今までの葬儀場とは違う場所に居た。

立ち上がると地面に目を凝らしてみた。

すると、今まで見たことのないような小さな生き物がいた。

花なんて今まで見た中で一番綺麗だと思えるようなものだった。

「こつちだ。」

突然声がし、後ろに気配もなく黒づくめで青い髪の男が立っていた。背が高く異様に存在感があった。

黒尽くめの男に着いて行った先には、澄んだ川があった。

魚が泳げるほど深い川ではなく、湧き水が集まって出来たような10cm程の深さの川だった。

その水を手にすくい、また川に返す。またすくい、返す。

「その水を飲め。」

黒尽くめの男は、言った。

神に会うためには、体の内側から綺麗にしないとイケないらしい。この川の水を飲めば、内側から綺麗になり、次第に外側も綺麗になるということだった。

智樹は頷き水を救って口に含んだ。

すると、心が浄化されるような、仲良くしたかった人と仲良くなれたような

嬉しいような、清々しいような、暖かな気持ちになった。

自然に微笑が浮かぶ。

「ニヤニヤするな。気持ち悪い。いくぞ。」

気分が良くなった頃で黒尽くめの男から声をかけられた。

そうして男は歩いていく。ひよろつとした男らしくはないが何故か人に物を言わせないような

黒尽くめの男の背中を智樹は睨むと、口を尖らせ男について行った。

着いて行った先には目薬があった。

目薬をさせば良いのかとそれを手に取り、ふたを回すと男は

「おい、それはその目に入れるものではないのは分かっているのか？
人間は第二の目があるのを気づいていないようだが……、まあ、
お前には分かるだろう。」

止められキョトンとする智樹を見て言った。

智樹は第二の目とかそういうえばインターネットとかテレビで見た気がしないこともないな

そう思ったが具体的にどこにあるのか分からず、固まった。

すると、男がゴホンと咳をし、ジッと智樹を見つめると右肩に目薬をと言うように自分の右肩を指差した。

言われたとおりにそこに目薬を差してみると、何かが変わった。

さっきと何かが違うのか分かるのだが、何が変わったのか分からなかった。

「それできつと神が見えるだろう。」

そう言った。

神が見えるようになるなんて、実際神はいるのだろうかと思
う。

だが今立っているこの世界や、天使と悪魔そしてこの男
今まで見たこともないようなものだった。

ぐると辺りを見渡すが智樹と黒尽くめの男以外誰もいなかった。
ただ、姿は見えないのだがさっきまでいなかった何かを感じたよう
な気がした。

それは智樹の後ろにあった一本の木からだった。

何か感じるかと男に聞こうとした瞬間、その木から黒い何かが飛び
出した。

「しゃあああつ！」

それは、ものすごい速さで飛び掛ってきた。

智樹は思っても見なかった出来事に身構えるのが遅れ、その場に倒
れ黒い生き物に馬乗りになられた。

見たことのない、まるで化け物か妖怪のようだった。

頭は小さく目は大きく真つ赤で口からは大きく長く鋭い歯が突き出
していた。

驚きのあまり智樹は声を出す事もできず、その化け物に抵抗する事
さえできなかった。

化け物は智樹の首もとを噛み智樹を殺そうとしているようだったが
かろうじて黒尽くめの男が

それを阻止していた。隙を見て男が一撃を加えると

そうすると化け物は逃げ去っていった。

「あ、ありがとう。」

智樹が言うと、男は智樹を睨んだが、何も言わなかった。そのとき、また近くに何かがあるような気配を覚えた。

サツと振り向くとそこにいたのは神々しい雰囲気を漂わせた5人と、あの天使と悪魔だった。

「先ほどはすみません。少し貴方を試したのですよ。」

しかし、貴方はあのモンスターたちを倒すには弱すぎる……。

これからしつかり訓練をして戦いに備えてください。私たちも戦いますが、限度があります。」

最後の望みとして貴方には死んでもらっては困ります。

この天使と悪魔を仲間とし、訓練に励んでください。貴方ならこの世界を救うことが出来るでしょう。」

5人の中でも一番神々しい光を放っている人が言った。

この人が俗に言う神様だと智樹は直感した。

だが、勝手にモンスターを倒す役目を担わされても困る、そう思ったがモンスターを倒すなんて

少しかだけワクワクした。いや、ドキドキ……？いつもと違う非日常的なものだとは分かった。

それを体験したかったのだ。

「とりあえず、訓練して、強くなって、モンスターを倒せば、幸せですね。」

そう言う。家に帰りたいという気持ちもあるが、いつもと同じつまらない日常に戻るのは嫌だった。

学校なんて友達なんてどうでも良く、とりあえず部活が楽しいから

いつているだけのものだった。

しかし、楽しいだけではやっていけず、試合にもあまり出れない。勉強も中の下ほどで、自分が人から求められる存在になれたら思っていた。

それが、今はどうだろう。神から求められる人間だ。理想的だった。

「俺、頑張ります。天使、悪魔これからよろしくな。」

そう神々しい5人と天使と悪魔に告げた。

良かったと、皆の中に和やかな空気が流れる。

訓練は大変だろう。モンスターはさっきのように恐ろしいだろう。しかし、智樹は決めたのだ。モンスターを俺が倒す……と。

まずは、訓練だ。

訓練をしないことには、何も出来ない。

まだ無力の智樹にはモンスターと戦う力もないのだから。

「訓練1だ。天使、剣の使い方を教えてやれ。」

悪魔は言った。

智樹の中では天使は何かボワツと気配的なもので敵を倒すようなイメージがあった。

だから、天使が智樹に剣を持ってテレビで見た騎士のように無駄なく剣を動かしたのには驚きだった。

啞然とする智樹に微笑み、近づいた天使は細い剣を智樹に手渡すと

「やってみて。出来ると思うけど……。」

そう言ったが、智樹には剣は思ったより重く天使のように振り回すことは出来なかった。

結構トレーニングをしてきたつもりでもあった智樹は、この細い剣を使う事ができず少しショックだった。

天使は剣が重い事に気づくと、悪魔と話し始めた。

遠くで話していたので、何を言っているか聞こえなかったが悪魔の智樹を見る呆れた顔に

智樹は剣を使えないことを天使が話しているのだと悟った。

そのまま少しの時間がたった。

言っただけだった、天使も悪魔も本で見るような格好をしている。

天使は白いし、悪魔は黒い。ただ、天使は質素だが悪魔は結構ジャラジャラ鎖やらつけていておしゃれに気を使っている感じた。まあ、服装にも性格が出るのだろ。智樹は思った。

そんな事思っている間に、天使と悪魔が二人とも智樹の方へ寄ってきて

悪魔が智樹から剣を奪い取る。そして無理に智樹の腕を引っ張り出すと、腕に手をかざした。

すると、みると腕に力が湧いてきて、もしかしたら剣が持てるように悪魔がしてくれたのではないかと思った。試しに剣を持ってみると、軽々と持てた。

「おお、天使剣が持てる。」

なんだか、嬉しくなり言う

「じゃあ、訓練始めようか。」

そう天使は言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5246y/>

僕のもとへ天使と悪魔がやって来ました。

2011年11月20日15時15分発行